慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「劣等生からの謝辞」
Sub Title	
Author	栗原, 玲児(Kurihara, Reiji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.505- 507
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0505

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

楽しく、有意義な学問の場であることを願っています。

藤田さん、村松さん、お疲れさまでした。

益々お元気で!!

（映画監督・昭和三十一年卒）

「劣等生からの謝辞」

栗原玲児

村松、藤田両先生がご退任、とうかがって、自分の中にあった中国文学科への親愛感、と言ったような気持ちが、はたり、と断ち切られるような感慨を味っています。とは言え、これまで年賀のご挨拶すら、ろくに差し上げていない礼を知らぬ生徒ですから、身勝手な感傷には違いありませんが、まるで自分の出自が失われてしまうような、中文が遠い無縁の存在になってしまうような淋しさなのです。私が、出来の悪い、名ばかり中文に籍を置いた学生だったから余計そう思うのかも知れません。もっとまともに学問をした学生ならば、両先生への愛惜の念も、その学問上のご業績への尊敬も、適確な言葉で表現できるでしょう。しかし、私には、両先生の優しい誠実なご人格が懐かしく思い出されるばかりです。

お二方とも、まことに温和なお人柄でありました。それを良いことに、我々学生どもは至極だらしなく講義を聞いていたものです。当時の中文は、人数が少いせいもあって、和気藹々というと聞こえがいいけれど、些かの緊張もなく、不遜にも煙草など吹かしながら授業を受けていたのです。

ところがお二方とも、学生どもの無礼を咎めるでもなく、常に微笑を絶やされることなく講義を続けられました。両先生が大きな声をお出しになったのを聞いたことがありません。

もとより出来の悪い生徒ですから、常に辛うじて落第を免れる、と言ったていたらくでしたが、こう申しては

失礼ながら、両先生の課目については落される恐怖を味わったことがありません。この年齢になって夢見が悪いと、屢々フランス語のテストに落ちる悪夢にうなされる（事実落ちた）というのに、藤田先生の中国語の及落に脅かされたことはないのです。藤田先生のこの温情が仇となって、折角中国文学科を卒業しながら、現在私、中国語に関しては目に一丁字もない有様で、中文出身と名乗る度に恥をかいているような後めたい気分を味っています。出来の悪い倅が、親を逆恨みするのに似ていますが、劣等生のことゆえお許し下さい。

またまた失礼を重ねますが、村松先生は、人のいい火喰鳥のような風貌で、頬っぺたの内側で声を転がすようにしてお話しになるのがなんとも可愛気で、お声に接するのが一種快感でありました。劣等生の悲しさで、原文も出典も記憶していませんが、唐代の小説中に鸚鵡を形容する文句があったのを、我々学生がなかなか鸚鵡のことと悟らず、村松先生が焦れて説明なさるうちに、いつか身をよじるようにして仕方話になったのが、まるで鳥そのものを彷彿とさせて、なんともおかしかったものです。

不肖の生徒で、世間並の義理すら欠いているのに、私が参議院選挙に立候補した時には、三田の教室に学生を集めて私に話をさせる会を開いて下さったことがありました。

世故に長けているとはとても思えぬ先生が、政治がらみの、最も俗世間的交渉ごとなど、さぞご苦労頂いたのであろうと、未だに申し訳なく思っております。

出版されたご著書は一応隈なく拝見しているつもりですが、仮にも中文に籍を置き、お教え頂いた者として、両先生の学者としてのご業蹟を正当に理解する能力もないことが、この期に及んでなさけなく、恥ずかしく、申し訳なくてならぬ思いです。

先年、私の初めてのミステリー作品を村松先生にお送り申し上げたところ勿ちお葉書を頂きました。

「ミステリーは読んだことがありませんが、ともかくご精進下さい」と二行。

おかしくもまことに有難く、先生の字がまた春の雲のように穏和な美しい字なので、額に入れて机の前に掛けています。

今後も不肖の生徒であり続けるであろうけれど、愈々のご精励を陰ながらお祈り申し上げる気持ちは人後に落ちないつもりです。

（フリーライター・昭和三十二年卒）

「初学のころ」

田川純三

こんど村松・藤田両先生が定年になるとお聞きして、時の経つのは早いものだという平凡な感慨がまず起りました。そういえば、学生だった私自身、まもなく五十五歳になり、定年が間近かに迫っているわけです。つぎにそうすると、私の学生時代、両先生とも三十をすぎたばかりの、いわば青年「老師」だったことになります。やはり、時の経過は「矢の如し」というべきでしょう。

昭和二十八年四月、私は塾に入学しました。当時、日吉では校舎はまだ進駐軍の兵舎跡を使っており、いわゆるカマボコ校舎でした。雨の日には、教室の移動には傘が必要でした。

入学当初から中国文学を専攻することに決めていた私は、当然中国語を履修することになりました。その第一日目、カマボコ校舎の窓からは、抜けるような青い空がひろがり、さわやかな風が春の匂いを運んでいました。そのなかを颯爽と現われたのが村松先生でした。

テキストは「急就篇」だったと思います。まず四声の練習から始った発音学習は、やがて有気音と無気音に進みました。村松先生の教授法は、掌に乗せたチョークの